【58】

氏　名（国籍）	宋　仁善（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4198　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**一九六〇年代後半の〈現実〉と〈架空〉** －大江健三郎の文学を中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	新　保　邦　寛
副　査	筑波大学助教授		青　柳　悦　子
副　査	筑波大学助教授		加　藤　百　合
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	齋　藤　　一

論文の内容の要旨

本論文は，デビュー 10 年の節目をむかえた大江健三郎の 1960 年代後半の文学活動を対象とし，大江が複雑な同時代状況にどのように対処したかを，4 つの短・中編小説とひとつの長編小説を具体的に分析することで追究したものである。

本論文は，以下のようになっている。

序章
第一章　アメリカ・日本・ベトナム戦争（Ⅰ）
　　―「走れ，走りつづけよ」―
第二章　アメリカ・日本・ベトナム戦争（Ⅱ）
　　―「生け贄男は必要か」―
第三章　漂泊するわれらの先祖あるいは異族
　　―『狩猟で暮らしたわれらの先祖』―
第四章　明治百年，あいまいな父親像をめぐって
　　―『父よ，あなたはどこへ行くのか？』―
第五章　終末のヴィジョンとエコロジーの芽生え
　　―『洪水はわが魂に及び』―
第六章　一九六〇年代後半，言葉と状況
　　― 創作方法をめぐって ―
結章

第一章では，ベトナム戦争のまっただなかの時代状況で書かれた短編「走れ，走りつづけよ」（1967 年）を対象として，そこに登場するアメリカの肉体派女優ペネロープと国連で活躍した日本人をとりあげ，それ

らがいかなる同時代的事態を表象しているかを追究している。

第二章では，ベトナム戦争をめぐる同時代状況に密接にかかわっている作品「生け贄男は必要か」(1968年)を対象とし，不況／戦争／復興という反復される近代以降の惨めなシステムが，「生け贄」という神話的なモチーフで表わされ，それがいかに問いただされているかを分析している。

第三章では，中篇小説『狩猟で暮らしたわれらの先祖』(1968年)を対象として，国家共同体と対照的な狩猟民族の末裔「山の人」「オロッコ人」をとりあげ，同時代の沖縄返還問題と状況のなかで，いかに大江が，近代国民国家の人為性・政治性を追究しているかを考察している。

第四章では，現在の自分のアイデンティティを求めるべく，2・26事件に巻き込まれた「父」の過去の行跡の断片を組み合わせようとする「僕」をとおして，大江が，同時代に起こった明治百年問題にからむ歴史認識や，その表象にどう対処したかを追究している。

第五章では，長編小説『洪水はわが魂に及び』(1973年)を対象とし，1960年代後半に反体制運動の一環として登場してきた反公害運動をうけ，「人類の黙示録的な終末の予兆」として「鯨の絶滅」を危惧する主人公，人類が「全歴史的規模の逆行をはじめてしまった」ことを警告する「縮む男」，知能薄弱で身体の弱い子供などをとおして，大江が，どのように日本列島の反エコロジー的風景や20世紀文明にかかわっているかを追究している。

第六章では，これまでの議論を総括するかたちで，こうした現実を虚構化する際に大江がとった方法が，どのようなものであったかを分析している。そこには，サルトルの「意識のオーケストレイション」の方法から，サルトル経由で知ったバシュラールのいう「想像力」の概念に影響された歪曲化の想像力やラブレーやドストエフスキーから，のちにはバフチンによって理論的に知ったメニッポス的諷刺の方法がみられると論じ，こうしたことが何よりも，「通常のリアリズムとは異なる独特の想像世界」を構築するのに作用しているという。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，ノーベル賞作家・大江健三郎の文学テクストと多面的な時代状況とを合わせて読むことにより，作家大江が，自ら捉えた60年代後半の現実と批判意識をいかなるかたちで一編一編の小説へ結実させたのか，その具体像を解明したものである。60年代後半は，大江にとって，作家としてデビューしてから10年経過した節目の時期にあった。本論文は，この時期の彼の文学が，先進国日本の隠された肖像に向けられ，経済旋風の裏に隠れて絶え間なく変化しつづける複雑な同時代の政治的・社会的状況の推移にいかに敏感に反応していたかをみごとに解明している。本論文がとりあげた作品群は，研究者から比較的注目されることの少なかったもので，具体的な時代状況との関連からの研究は皆無に近かった。それは，同時期の代表作『万延元年のフットボール』の惑星的存在とされる傾向にあったからと思える。本論文は，こうした偏見から該当作品を救い出し，それ自体の価値を見出すとともに，これらの作品にはその後の大江文学の中心的な視点があるとし，この時代を大江文学の重要な時期であることを指摘した。

本論文は，作家論的にも作品論的にも，また理論的に見ても，きわめて完成度の高いすぐれた著書にできあがっており，おそらく，誰しも驚かされるのは，その達意の日本語であろう。著者が日本人でないとは信じることもできないほどみごとなものであり，この点は特筆すべきことである。本論文の優れていることは，本論文の一部が，すでに全国規模の学会誌に2篇掲載され，さらに優秀論文として紹介もされていることによっても裏付けられる。著者は，日本の学界の中でも，その学力と学識と解釈力の点でレヴェルの高い研究者である。

そして，本論文から誰しもが受ける印象は，なによりも，著者には，テキストの綿密な読みに裏付けられ

た，細部の解釈からテキストの生産された時代へとつないでいくダイナミックで見事な手腕が備わっているということである。

本論文が達成した成果は，なんといっても，大江文学研究の空隙を巧みに析出し，従来ほとんど注目されず看過されていたテキスト群に存在性をあたえ，その空隙を埋めたことにあろう。それも，ただ単に埋めただけではなく，そのテキスト群が，70 年代以降の大江文学の主要テーマを胚胎させた質的転換をなす，実は，とても重要な時期のテキスト群であることを，説得力を持って論証したことにある。

以上のように，本論文はきわめて優れたものであるが，敢えてないものねだりするなら，自らの文学や思想を作品以外でも語ることが大江の特性であるが，そうした大江の発言に忠実になりすぎてはいないかということである。もっと，大江自身の発言をくつがえし，大江が意識しなかったこと，大江がここで述べてはいても以後まったく扱っていないこと，などを析出してほしかった。とはいえ，これは，今後の課題としてよく，本論文が関連学界に大いに貢献することは明らかであり，学位論文として十分な水準に達していると判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。